

特別展 「日本美術をひも解く—皇室、美の玉手箱」

東京藝術大学大学美術館 2022. 08. 06～08. 28(前期) 08. 30～09. 25(後期)



当美術館は、美術作品やそれに関わる資料を収集し、研究することにより新しい価値を見出している。

さらに将来の評価にも備えて万全の設備によって保存し、研究の成果を展示や様々な普及活動によって公開・運営がされる、わが国には前例のない実験的な館として機能することを基本理念としている。

本展は、「宮内庁三の丸尚蔵館」が収蔵する皇室の珠玉の名品に、東京藝術大学のコレクションを加えた「82件」の多種多様な作品を通じて、「美の玉手箱」をひも解き日本美術の豊かな世界を観賞できる。

狩野永徳 《唐獅子図屏風》(前期) 六曲一隻 紙本金地着色 16世紀後半
安土桃山時代を代表する高さ2mを超えるとても大きな画面は、大物揃いの桃山屏風の中でも格別なサイズで、モチーフもまた壮大で典型的な大画で、破格の気宇壮大な作品である。「唐獅子」の体部はたっぷりとした筆で伸びやかに描かれて、たてがみと尻尾の部分は筆を振動させて円環のリズムを作り、背景の樹枝や岩壁は荒っぽい速筆で簡単に処理されているのが特徴である。

右側は、初々しさを残しながら、すでに王者の片鱗を発揮しつつある若獅子で、左の獅子は慈愛に満ちた眼差しを注ぎ帝王の十分な風格を漂わせている。

伊藤若冲 《向日葵雄鶏図》(後期) 絹本着色 1759年



画伯は、新しいものに好奇心を寄せ、エキゾチックなヒマワリの新種を一早く花鳥図のレパートリに取り入れている。画面の中心に描かれた雄鶏のトサカの朱や尾羽の白と黒のコントラストは、実に目も覚めるように鮮やかである。画面上方のヒマワリの花の黄と葉の緑の斑は、色調を押さえて脇役となっていて、全体が作り出すには、見事な色彩のハーモニーである。

綿のように色鮮やかな鶏の羽根は、画伯の超絶技巧極彩色のアラベスク(アラビア風模様)で、虫食い跡が散見される枯れけた向日葵の葉と黄色の花、さらに青と白の対比が印象的な朝顔や片足で立つ雄鶏の勇ましい姿が強調されている作品である。